

明細書

水の浄化方法及び装置

技術分野

本発明は、水の浄化方法及びそれに用いられる装置に関するもので、特に細長い閉鎖された水路を利用し、浄化効率を高め、保守を容易にした浄化方法及び装置に関するものである。

背景技術

生活排水や魚槽等の水を浄化するための従来の基本的システムは、①先ず固体をスクリーニング(フィルタ)で物理的に排除し、②次いで、主原因物質である有機物から発生するアンモニアを活性汚泥等の好気性微生物の働きにより亜硝酸へ、更に硝酸塩に変化するまで、酸化分解(硝化)する方法を探るのが一般的である。また、これのみでは水中の硝酸塩が水の酸性度を高め富栄養化の原因となるため、第3のステップとして嫌気性微生物の働きにより、窒素成分を窒素ガスの形で除去(脱空)し、より高度な浄化を行うことが試みられている。

しかしながら、好気性微生物を利用した硝化の過程では、微生物の活動を活発ならしめるため相当量の酸素を必要とし、場合によって流動、攪拌等の手段も用いて積極的に酸素を供給するのに対し、嫌気性微生物を利用する脱空の過程では脱空槽を密閉したり、一時的に水の流れを滞留させるなどして酸素を遮断する必要がある。

この硝化、脱空の過程の相反する条件を、同一の設備内で一連に連続的に行わせるることは極めて困難でそれが装置の実用化(小型化)の隘路となっていた。

発明の開示

本発明は細長く閉鎖された水路の前段部において好気性微生物を繁殖させて硝化作用を行わしめ、好気性微生物によって酸素がほぼ消費された後段に、嫌気性微生物の繁殖を促進する栄養源を配置し、同一水路内で定量の水を継続的に流し続けながら硝化・脱窒作用を連続的に行わせるようにしたものである。

また細く長い水路を用いることにより、濾材の特定部分を水が選択的に流れるいわゆるチャネル現象を防ぎ、濾材を有効に利用できると共に、同一水路内に好気性微生物と嫌気性微生物が場所を変えて併存することが可能となり、ほぼ完全な浄化水を得られるとともに装置全体の小型化も実現できる。

図面の簡単な説明

図1 本発明の基本的原理を説明する図

図2 本発明の水路として使用される筒体の構造を表す図

図3 筒体内部に挿入される内筒

図4 本発明装置の実験結果を表すグラフ

図5 本発明装置の実験結果を表すグラフ

発明を実施するための最良の形態

図1は本発明の最も基本的な実施の形態を示す図である。

図1において、被淨化水は左上部の「水槽から」の矢印に示すように被淨化水槽からポンプによって汲み上げられ、左端の筒状の「ろ材容器」に供給される。複数の「ろ材容器」(図示の例では8本)は1下で交互に水流的に連結されており、矢印に示すような経路をたどって右端の「ろ材容器」に到り、そこからもとの水槽に戻されるようになっている。

8本の「ろ材容器」は全体として細く長い閉鎖された水路を構成している。

左端のろ材容器は固体物を取り除くための「物理ろ過部」を構成しており、それに続く6本のろ材容器は「好気性バクテリアによる生物ろ過部」となっている。

また、右端の「ろ材容器」は「嫌気性バクテリアによる生物ろ過部」となる。

被淨化水は「ポンプ」から左端の「ろ材容器」に供給された状態では有機物と共に好気性微生物の繁殖に十分な酸素を含有しているが、右に進むに従って好気性微生物によって酸素は消費され、含有量が低下し右端の「ろ材容器」に到達した段階で殆ど存在しなくなる。一般に嫌気性微生物が繁殖できるための水中酸素濃度は2mg/l以下と云われているが、この段階において、水中酸素濃度はほぼその数値に達している。

この間に被淨化水中の有機物は硝化され、それに伴なって硝酸塩の濃度が増加するがこの硝酸塩成分は右端の「ろ材容器」中の嫌気性微生物によって脱窒され淨水となって水槽に戻されることになる。

図2は個々の筒状の「ろ材容器」の内部構造の一例を示す断面図である。

図3は、図2の筒状の「ろ材容器」の中に収納されるろ材を入れる内筒である。

図3に示す内筒1内には、ろ材2(図2)が充填されていて、内筒1の中心軸1aは内筒の上下端部より突出されて設けられている。また、内筒1の上端部には内部にろ材2を充填した後に、水が通過する多数の小孔3aを設けた蓋3が嵌められる。内筒1の底部にも小孔1cが設けられている。

図3に示す内筒1は図2に示す筒体5内に収納される。図2に示す筒体5は側面の上端の対向する位置に蓋6a, 6b付きの連通部5a, 5bが一对設けられている。また筒体5は側面の下端の対向する位置にも蓋7a, 7b付きの連通部5c, 5dが一对設けられている。

一つの筒体5の上端の連通部5bはその右側に隣接する筒体5(図示せず)の上端の連通部5aに嵌合可能な構造となっていて、これを嵌合することで二つの筒体5、5の間には連続した水路が形成される。同様に隣接する二つの筒体5、5の下端同士の

連通部5c, 5d間でも嵌合により水路が形成できる。これらの間は直接嵌合しない場合でも、ゴムやプラスチックのパイプなどで接続することもできる。

また、筒体5の下端の連通部5dとその右に隣接する筒体5(図示せず)の上端の連通部5aをパイプで連結するという接続方法も可能である。

また、筒体5の上下の連通部5a～5dより外側の側面には蓋付小孔5f, 5g, 5h, 5iを形成しておけば、必要に応じ通気孔或いは排水孔として隨時利用できる。

例えば、筒体5の内部に異常なガスの発生が認められた場合、その部位の上部小孔5f, 5gの蓋を開ければガスを取り除くことができる。また、沈殿物等があるときは下部小孔5h, 5iの蓋を開け流出させることができる。

更にこの小孔を利用して、好気性微生物による硝化区域にある筒体5中の水の一部を、嫌気性微生物による脱空区域の筒体に入る前の段階で取り出し、これを水槽に還流し水質や嫌気性微生物の生育の調整に用いることもできる。

即ち、硝化区域を構成する筒体の総延長が短か過ぎたり、水量が多くすぎたり、或いは水量に比しろ材の分量が少な過ぎたりした場合は、嫌気性区域に流入する水の酸素の残存量が過大となり、嫌気性区域での嫌気性微生物の生育に影響を与える場合があるので、水質を監視しながら、水の一部を嫌気性区域に入る前に取り出す必要があるが、その場合のバイパス経路の取出口として用いることができる。

筒体5の底部は閉塞しているが、頂部は内筒1を出し入れするための開口状となつておらず、蓋8を設けることで開閉自在となつてある。

このように、ろ材2を収納する筒体を同一規格のカートリッジ化したユニットとしたので、廉価に製造できるだけでなく、適切な個数の筒体5を接続することで、必要な長さの浄化装置を組み立てることができる。

組み立てにあたっては、筒体5の長手方向が鉛直方向に向かうように並列配置して、それぞれの上下の連通部5a～5dを一つおきに順次接続し、不要の連通部は蓋でふさぐことにより、全体として図1の矢印で示す如き、長いジグザグ状水路を作ること

ができる。

また、下部連通部5dとその右に隣接する筒体の上部連通部5aをパイプで繋ぎ、それを繰り返すことによっても同様の長いシグザグ状の水路を作ることができる。

なお、筒体5を複数個予め組み合わせたブロックを作り、これを連結して使うこともできる。

実際の使用に当たっては、最先端の筒体5の連通部5aに被淨化水を導入する如くし、内筒1には物理的ろ過に適したろ材を封入する。

また最終段の筒体5には、嫌気性微生物の繁殖に適したろ材を封入し、連通部5bより淨化水を排水するようとする。

実施例

本発明を観賞魚の水槽の淨化装置に適用した場合を例にとると、次の如くなる。

各筒体5の直径は約3cm、長さ約30cmとする。

一般的に60型と呼ばれている巾60cmの角型水槽ではこれを8本連結して用い、その場合有効な筒体総延長は約12m28cmとなる。巾120cmの水槽の場合には更に8本を連結することにより、総延長は約4m56cmとなる。

60型水槽に本発明の装置を使用した場合について、市販されているもつとも一般的な淨化装置との比較実験を行った結果を第4図及び第5図に示す。(実験者:東京工業大学助教授、辻正道氏) 実験は、同大水槽に同一条件の水を同量用い、これに健康なエンゼルン・インシュを夫々20匹づつを放して行われた。

比較用の水槽にはエーハイム社製2426型ろ過器を用い、これには同社の推奨するろ材、エーハイサブストラット2.5l及びエ・ハイメック1.5lを使用した。一方本発明装置には第一段階の物理ろ過用にスポンジフィルターとウールマットを使用し、好気性ろ過区域にパワーハウスマ型O.881及びS型O.881を使用した。また、終段の嫌気性ろ過区域には有機炭素製剤であるデニボール(商品名)100gを使用した。

その結果、第4図に示す如く、ろ過水の硝酸塩濃度は実験開始15~18日経過後、

両装置共に上昇しはじめたが、本発明装置では23～24日頃から徐々に下がりはじめ、60日以降はほぼ一定に保ったのに対し、比較水槽ではその後もなお上昇し続けた。そして第5図に示す如く、本発明装置ではPHが7.0とほぼ安定したのに対し、比較水槽では急激に下がり続け、42日目には遂にエンゼルフィッシュの生存限界といわれるPH4.5に達し、実験は中止せざるを得なくなつた。

なお、本発明装置においては引き続き9ヶ月経過後も健全に成長し続けている。即ち、通常の觀賞魚飼育程度では全く水替えの必要がないことを意味し、飼育上最大の問題点であった水替えの患わしさを無くしたとも言えるものである。

なお、本発明装置においても当初は比較水槽と同様に硝酸塩が上昇したにも関わらず、やがて低下に転じたことは、最初は水路中に嫌気性微生物が殆ど存在しなかつたものが、終段における嫌気性環境の醸成と、有機炭素の作用により、嫌気性微生物の繁殖が促がされ、本来の機能が働きはじめたためと推定される。

なお、上記実施例においては、觀賞魚水槽の浄化について説明したが、被淨化水が下水、屎尿、河川水等の場合でも同様に適用することができる。被淨化水の水質によっては、嫌気性微生物の繁殖のための栄養源となる有機物の含有量がはじめから少ない場合もあるが、本発明の方法、装置によれば終段のろ材に嫌気性微生物の栄養源となる有機性プラスチック、有機性炭素等を配給することにより、如何なる性質の被淨化水にも対応できる。

産業上の利用可能性

以上の如く、本発明は細長く閉鎖された水路を用いることにより、終段において嫌気性微生物増殖の好環境を作りだし、嫌気性微生物のもたらす脱窒作用により、ほぼ中性に水を浄化するという作用を連続的に長期間单一の装置で行うことができる方法と装置を提供するものである。

また、筒体を連結し細長い水路をジグザグ状に形成することにより、チャネル現象

の発生を最小に抑えると共に、ろ材の交換を容易にし、装置を小型化できるというメリットがある。

請求の範囲

1. 細長く閉鎖された水路に、被淨化排水を流し入れ、水路の被淨化排水の入り口側に近い区域において、好氣性微生物による硝化作用を行わせ、被淨化排水の出口側に近い区域において嫌氣性微生物による脱窒作用を行わせ、硝酸塩の含有を可及的に小とした淨化排水を作る水の淨化方法。
2. 細長く閉鎖された水路からなり、被淨化排水の入り口側に近い部分に、好気性微生物の繁殖する区域を設け、被淨化排水の出口側に近い部分に嫌氣性微生物の繁殖する区域を設けた水の淨化装置。
3. 細長く閉鎖された水路が、ジグザグ状に形成された請求項2記載の水の淨化装置。
4. 細長く閉鎖された水路が、複数の筒体から成り、その上端部及び下端部が交互に接続され、ジグザグ状の水路を形成するようにした請求項2記載の水の淨化装置。

要 約 書

水の浄化作用のうち、好気性微生物による硝化作用を利用するものと、嫌気性微生物による脱窒作用を利用するものは、微生物の繁殖条件を異にすることから、一連の装置で効率的に行なうことが困難で、装置も大型化する。

本発明は、細く長い閉鎖された水路を利用することにより、同一装置内の異なる場所に好気性微生物の存在する区域と、嫌気性微生物の存在する区域を共存させ、効率的な浄化作用を行わしめ、装置も小型化が可能となる。